

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00945

研究課題名（和文）境界域をまたぐ朝鮮人の社会に関する総合的研究 - 朝鮮南部・玄界灘・瀬戸内を対象に

研究課題名（英文）A Comprehensive Study of Korean Society Across the Borderlands: Southern Korea, the Genkai Sea, and the Seto Inland Sea to

研究代表者

愼 蒼宇 (Shin, Chang U)

法政大学・社会学部・教授

研究者番号：80468222

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日清・日露戦争の時期から1950年代までの時期を対象とした、当該境界域をまたぐ朝鮮人の生活と運動、社会形成に関する総合的な研究である。具体的には、朝鮮半島南部と玄界灘（対馬・壱岐・五島列島ほか）、そして瀬戸内の島嶼・沿岸地域をフィールドとし、朝鮮半島南部を出身地とする朝鮮人による玄界灘、瀬戸内沿岸への境界域をまたぐ移住と生活、労働の実態、当該境界域における朝鮮総督府・国・自治体による対朝鮮人政策、島嶼社会との生活空間での接触、移住朝鮮人による、当該地域での社会形成や当該境界域内外をまたぐネットワークの形成、民族・労働運動の展開、の4点に着目した研究である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、近現代を通じた通時的な分析、在地レベルでの実証的な研究という点において独創性を有する。朝鮮南部・玄界灘・瀬戸内の沿岸・島嶼は、日本の朝鮮植民地化以降、植民地朝鮮と大阪・長崎・下関を結ぶ大動脈の航路となり、沿岸・島嶼地域では朝鮮人の移入・移出が増大し、敗戦後は朝鮮半島へと帰国しようとする朝鮮人が日本全国から多く集まった地域である。当該境界域をまたぐ朝鮮人の多くは炭鉱や土木労働を中心に、軍事工場・基地関連の労働、農業・漁業などの労働に従事していた。当該境界域の朝鮮人は、「境界」における日本社会とマイノリティーの関係を分析する上で最も適した事例といえる。

研究成果の概要（英文）：This study is a comprehensive study of the lives, movements, and social formations of Koreans across the border region, covering the period from the Sino-Japanese and Russo-Japanese wars to the 1950s, and will examine (1) the actual situation of migration, lifestyle, and labor of Koreans from the southern Korean Peninsula across the border region to the Genkai Sea and Seto Inland Sea coast, (2) the policies of the Korean governor-general, state and local governments toward Koreans in the said border region, (3) the policies of the Korean This research focuses on the following four points: (1) policies toward Koreans by the Korean Governor-General, national government, and local governments in the border region; (2) contact with island communities in their living spaces; and (3) social formation, network formation, and the development of ethnic and labor movements by migrant Koreans in and beyond the border region.

研究分野：歴史学

キーワード：在日朝鮮人 境界 冷戦 植民地 ネットワーク

1 研究開始当初の背景

朝鮮と玄界灘・瀬戸内との関わりや人の移動・社会形成に関する研究は多く存在するが、近現代史におけるその特徴を整理すると在朝日本人に関する研究が圧倒的に多い。在朝日本人の出身地は、山口・広島・北九州・長崎などが多いことから、これらの地域出身の在朝日本人に関する多くの研究がある。近年では朝鮮半島沿岸漁業への瀬戸内漁民の進出や朝鮮漁民との摩擦に関する研究や、対馬・釜山の境界地域における在朝日本人の内部葛藤（構造と意識）や地域交流に関する研究などが注目される。

また、済州島-大阪航路を通じた在日朝鮮人の移動とそのネットワーク、生活史についての研究は多く存在する。しかし、その対象は済州島出身の在阪朝鮮人に関するものが中心であり、海域の全航路の中で寄港地のない沿岸地域や農村・漁村、島嶼の在日朝鮮人史に関する研究はほとんどない。また、長崎・北九州・山口・広島など当該境界域に根ざした地域史としての在日朝鮮人史研究はあるが、朝鮮半島も含め、それらの地域をまたがる朝鮮人の移動と生活、労働、社会形成の特質を寄留の出入りも含め総体的に扱った研究は少なかった。

以上の研究状況から導き出される本研究の課題は、(1) 明治以降、とくに朝鮮植民地化以降の朝鮮南部・玄界灘・瀬戸内（とくに都市以外の島嶼・農村）における対朝鮮・朝鮮人政策（国、朝鮮総督府、地方自治体、産業界レベル）、(2) 移住朝鮮人の社会形成と現地社会との接触、(3) 境界域をまたぐ朝鮮人のネットワーク、意識と行動、運動に関する分析という三点に集約可能であった。

2 研究の目的

植民地期から戦後にかけて、日本に移動する朝鮮人は玄界灘を渡り、下関、瀬戸内、大阪へと移動してネットワークを広げていたことがこれまでの研究でもわかっている。応募者はこれまでの科学研究において、そのなかの対馬、瀬戸内の沿岸・島嶼における朝鮮人の社会形成と現地社会との接触、政府・自治体の対朝鮮人政策について総合的に研究を進め、とりわけ対馬においては研究代表者・分担者4名による新たな研究成果を公表した（「特集 近現代の対馬における朝鮮人と現地社会」『大原社会問題研究所雑誌』706号、2017年8月）。また、瀬戸内においても広島県を中心に史料収集と考証を進め、研究成果報告書にまとめた。

朝鮮南部・玄界灘・瀬戸内の沿岸・島嶼における朝鮮人の移動・社会形成史を、明治維新以降、1950年代までという長いスパンにおいて、日本政府・朝鮮総督府・占領当局・自治体・社会との関係から「問う」という本課題は、従来の研究の課題を大きく克服するものであり、これまでの申請者の科研の成果も乗り越えうるものである。

3 研究の方法

本研究は、朝鮮半島南部、とりわけ玄界灘の沿岸・島嶼の在日朝鮮人の多くの出身地である慶尚南道と全羅南道・済州島、長崎の島嶼と佐賀・福岡の沿岸、瀬戸内沿岸と島嶼（まだ調査をしていない地域を中心に）をフィールドとした。そして、当該境界域をまたいで移動・

居住し、ネットワークを形成する朝鮮人を中心に、彼らと接触する自治体・警察・軍隊・村落・産業界を具体的な分析対象とした。そのため、朝鮮総督府・自治体・警察・法務関係資料・GHQ 関係資料、各種社会団体の編纂誌、当該地域の郷土新聞、朝鮮人自身の手記・雑誌・新聞の調査・整理を進めることを計画した。

史料調査は、2019 年度は佐賀県立文書館、佐賀県立図書館、五島市立図書館、五島観光歴史資料館、長崎歴史文化博物館郷土資料室、直方市立図書館、福岡県立図書館、久留米市立図書館郷土資料室、ミライ on 図書館、熊本県立図書館、熊本市立中央図書館で、所蔵の行政文書・市町村役場文書、郷土資料、地方新聞などの資料調査を中心に行った。そして、2020 年度は韓国慶尚南道・全羅南道・済州島での資料調査を行う予定であったが、この年 2 月以降、新型コロナウイルス感染の猛威が世界を覆い、2020 年度、2021 年度は実質的な資料調査を行うことがまったくできなくなってしまった。この段階で海外での資料調査は展望が見えないと判断し、韓国での資料調査は断念した。

2022 年～23 年度は研究期間を延長し、改めて当該研究に関わる領域での資料調査を再開した。2022 年度は長崎県立図書館郷土資料センター、島原図書館、岡山市立中央図書館、高知県立公文書館、オーテピア高知図書館、高松市公文書館、広島県公文書館で所蔵の行政文書・市町村役場文書、郷土資料、地方新聞などの資料調査を中心に行った。最終年度の 2023 年度はさぬき市公文書館、高松市歴史資料館、高松市平和記念館、坂出市立大橋記念図書館、福山市中央図書館、兵庫県立図書館、神戸市立中央図書館で同様の資料調査を行った。

これらの史料分析をもとに、当該時期における朝鮮南部・玄界灘・瀬戸内の沿岸・島嶼における朝鮮人の移動・社会形成史を解明する。

計画年度内に明らかにしようとした具体的内容は以下の三点である。

【1】「韓国併合」までの時期

長崎県・福岡県・山口県・広島県・岡山県・香川県の県市町村官公庁資料と地方新聞を中心に分析を行う。これらの史料分析をもとに、当該時期における朝鮮半島から当該地域の島嶼・沿岸への人の移動とその実態に接近する。

【2】植民地期

【1】の資料に加え、総督府関連の資料や各自治体誌、各種社会団体の編纂誌、総督府官僚の手記などの資料を中心に、対朝鮮・朝鮮人政策の展開とその実態を解明する。さらに、上記自治体の地方新聞や人々の回想録などを中心に、境界における朝鮮人社会の形成とネットワークの様相を解明し、朝鮮人自身の手記や発行雑誌、新聞などの資料を分析して、当該地域における朝鮮人の社会形成、アイデンティティの様相とその実態を明らかにする。

【3】戦後～1960 年代まで

上記の資料調査において、広島などで最も多くの行政文書、市町村文書の発掘ができた時期である。これらの資料に加え、各県の GHQ 関連資料、官公庁資料、その他新聞雑誌、

自治体誌などの資料を中心に、当該領域における戦後の日本政府・自治体の対朝鮮・朝鮮人政策の展開と実態を明らかにする。

さらに、朝鮮人運動関連の雑誌・新聞・手記・回想録・証言集などの資料を中心に、戦後瀬戸内沿岸・島嶼における朝鮮人社会の様相と変化、東アジアの冷戦・日本の逆コース、南北分断体制の形成との関わりなどを明らかにする。

4. 研究成果

まず、お断りをしなければならないのは、新型コロナウイルス感染の影響で、2020年から2022年前半にかけて実質的な資料調査ができず、とくに韓国での資料調査を断念せざるを得なかった点である。そこで、本科研では韓国の部分の検証は今後の課題とする形で、それ以外の地域での資料調査をもとに考証を進めた。ここでは以下の二点について、その成果を記述する。

(1) 日本政府の朝鮮・朝鮮人政策の展開（19世紀末～1960年代）

当該研究が扱った時期において、釜山から玄界灘を通り、長崎・福岡、門司・下関を経て、瀬戸内海とその沿岸地域を通るルートは、外地である朝鮮半島と内地を航路でつなぐ「海域」として、大きな役割を担ってきた。近世においては、このルートでの朝鮮人の移動は、朝鮮通信使か漂流民であり、それへの対応は幕府と藩が担ってきた。

1872年以降、朝鮮人漂流民への管轄が近代的な体制へと転換（外務省の管掌）していったが、他方で、19世紀末までは従来の漂流民としての扱いと同様の慣習も玄界灘近辺の県では継続した。つまり、近代主権国家としての扱いの過渡期的両存状況が当該地域においても存在したのである。

植民地期になると、釜山・大阪という航路の拠点をはじめ、門司・下関の朝鮮人人口が増大し、そこから中枢産業部門の存在する都市、すなわち山口県の宇部、広島県の広島、呉、三原、福山などにも多くの朝鮮人が集住するようになる。2016～2019年の科学研究（基盤研究C）「瀬戸内の島嶼・沿岸の朝鮮人社会に関する総合的研究 - 19世紀末～1950年代」では、中枢産業部門を持たない農村にも少なくない朝鮮人の寄留、あるいは居住の痕跡が見られたことを、岡山・香川の市町村で確認したが、本科研においては岡山県下の市町村の在日朝鮮人口を記した国勢調査（1925）（1940）から、岡山全体と市町村別での朝鮮人口の増減の推移を把握することができ、上記の指摘が正しいことをより客観的に確認した。島嶼においても、小豆島については朝鮮人の存在を確認することができた。嶋田典人「残された旧村役場文書と県立公文書館の役割—調査・保存・利活用への提言」『レコード・マネジメント』（第77号、2019年）によると、2018年に香川県立文書館が小豆島内の4出張所および三木町内の3出張所を訪問調査し、このうち坂手村役場文書中の関東大震災救援関係書類と、福田村役場文書中の「寄留届綴」と「耕地整理組合文書」を借用して分析をおこない、その成果を嶋田典人「出張所アーカイブズの調査・研究と保存・利活用—震災・移動・耕地

整理組合関連の組織間収発と経緯がわかる公文書」（『香川県立文書館紀要』第22号、2019年）としてまとめた後、原資料を小豆島へ返却したとある。今後の資料調査への手がかりも広げることが出来た。

日中戦争以降、玄界灘・瀬戸内のルートを通じて、近接地域の鉱山をはじめ、発電・鉄道・道路工事、軍事工場・基地工事などの現場に多くの朝鮮人が強制動員された。今回の史料調査を通じて、これまでその存在があまりクローズアップされてこなかった五島列島における朝鮮人強制労働に関する証言が記載された郷土文献（五島文化協会創立50周年記念誌『五島に暮らす－戦中戦後・汗の記録』2011年）を入手し、五島鉱山、野々切飛行場建設などで朝鮮人の強制労働力動員が行われていた証言が残っていることを確認した。

朝鮮戦争に至る過程で冷戦の緊張が増大したことで、在日朝鮮人組織・運動の取締りや、南朝鮮における政治的・経済的混乱の継続に伴う日本への流民の増大に対する取締りを強化していったことが、岡山市立中央図書館所蔵の吉備郡真金町役場文書にある外国人登録関係史料や、郷土新聞の記事などを通じて間接的に浮き彫りになった。

(2) 瀬戸内沿岸・島嶼における行政や産業界による対朝鮮、対朝鮮人政策の展開

今回の調査で体系的な形で朝鮮人に対する行政のありようを把握できたのは広島県と岡山県であり、どちらも戦後が中心であった。広島県立図書館所蔵資料のデータベースを通じて、2016年2月に閲覧申請をおこなっていた「要審査」書類のうちのいくつかを本科研期間に閲覧することができるようになったのである。

官憲側の収集による社会運動資料と思われる「特別調査一件」のうち、「地方課 特別調査一件④12冊の内11」および「地方課 特別調査一件④12冊の内12」の簿冊全体が朝鮮人関係でまとめられていた。いずれも1950年代初頭における在広島朝鮮人の生活・運動に関して村単位に及ぶ詳細な状況が記されていた。その内容は膨大であり、かつ今まで取り扱われたことのない具体的なものである。その分析を中心に、研究成果と同様、論文という形で成果を示したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計16件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 愼 蒼宇	4. 巻 765
2. 論文標題 朝鮮「暴徒」像の形成 - 義兵戦争と日本の郷土新聞	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大原社会問題研究所雑誌	6. 最初と最後の頁 19-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 愼 蒼宇	4. 巻 27
2. 論文標題 朝鮮近代史の立場から - 「植民地戦争」の視点から見た日本の植民地支配責任	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 学術の動向	6. 最初と最後の頁 54-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鄭栄桓	4. 巻 256
2. 論文標題 敗戦前後の朝鮮人の移動と定着：徳島県名西郡下分上山村・神領村を事例に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 歴史と経済	6. 最初と最後の頁 41-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鄭栄桓	4. 巻 868
2. 論文標題 在日朝鮮人史から考える日本占領：アジア冷戦をめぐる暴力と連帯	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 51-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 檜皮瑞樹	4. 巻 125
2. 論文標題 明治初年の北海道開拓移住；有珠郡を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Arctic Circle (北海道立北方民族博物館友の会・季刊誌「アークティック・サークル」)	6. 最初と最後の頁 4-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 檜皮瑞樹	4. 巻 34
2. 論文標題 歴史資料の非対称性と歴史研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 アーカイブズ学研究	6. 最初と最後の頁 40-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 慎 蒼宇	4. 巻 1017
2. 論文標題 2021年度歴史学研究会大会報告批判 近代史部会	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 40-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鄭栄桓	4. 巻 1017
2. 論文標題 2021年度歴史学研究会大会報告批判 現代史部会	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 44-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 慎 蒼宇	4. 巻 第58集
2. 論文標題 「朝鮮植民地戦争」の視点から見た武断政治と三・一独立運動	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 朝鮮史研究会論文集	6. 最初と最後の頁 85-126
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鄭栄桓	4. 巻 845
2. 論文標題 書評 本岡拓哉著『「不法」なる空間を生きる』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 98-102
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 檜皮瑞樹	4. 巻 なし
2. 論文標題 「明治初期北海道開拓移住と東北諸藩」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『越境をめぐる歴史』	6. 最初と最後の頁 83-94
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮本正明	4. 巻 50
2. 論文標題 「取調記録を通じてたどる「二・八独立宣言」への道程」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『在日朝鮮人史研究』	6. 最初と最後の頁 39-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 愼 蒼宇	4. 巻 728,
2. 論文標題 「植民地（征服／防衛）戦争の視点から見た朝鮮三・一独立運動」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『大原社会問題研究所雑誌』	6. 最初と最後の頁 16-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15002/00022227	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 愼 蒼宇	4. 巻 989
2. 論文標題 「日本近代史の「不在」を問う 朝鮮植民地（征服／防衛）戦争からみた官民の「暴徒膺懲」経験」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『歴史学研究』	6. 最初と最後の頁 2-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 檜皮瑞樹	4. 巻 989
2. 論文標題 明治初年の北海道移住と在地社会 - 胆振国有珠郡を中心に -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『歴史学研究』	6. 最初と最後の頁 116-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鄭栄桓	4. 巻 19(1)
2. 論文標題 The Japanese Military 'Comfort Women' Issue and the 1965 System: Comfort Women of the Empire and Two-fold Historical Revisionism	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 European Journal of Korean Studies	6. 最初と最後の頁 201-227
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件（うち招待講演 10件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 檜皮瑞樹
2. 発表標題 越境する主体と共同体（コメント）
3. 学会等名 2022年度民衆史研究会シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鄭栄桓
2. 発表標題 土井智義『米国の沖縄統治と「外国人」管理 強制送還の系譜』（法政大学出版局、2022年）へのコメント
3. 学会等名 沖縄関係学研究会・近現代東アジア研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 愼 蒼宇
2. 発表標題 朝鮮近代史の立場から - 「植民地戦争」の視点から見た日本の植民地支配責任-
3. 学会等名 日本学術会議シンポジウム（アジア研究・対アジア関係に関する分科会主催） 「歴史認識と植民地責任」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 愼 蒼宇
2. 発表標題 日本の植民地化と朝鮮の民族運動 - 「植民地戦争」の視点から
3. 学会等名 植民地化・植民地支配・脱植民地化の比較研究 フランス・アルジェリア/日本・朝鮮関係を中心に（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鄭栄桓
2. 発表標題 日本への朝鮮人移住および強制動員の歴史とその法的地位 植民地期から解放直後を中心に
3. 学会等名 植民地化・植民地支配・脱植民地化の比較研究 フランス・アルジェリア/日本・朝鮮関係を中心に(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鄭栄桓
2. 発表標題 「日本帝国」膨張・崩壊期における移動と地域：徳島県西郡神山町役場文書から(報告3 敗戦前後の朝鮮人の移動と定着)
3. 学会等名 政治経済学・経済史学会 秋季学術大会 パネルディスカッションC
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 檜皮瑞樹
2. 発表標題 19世紀の東北諸藩と北海道開拓移住
3. 学会等名 第20回日韓歴史家会議(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 檜皮瑞樹
2. 発表標題 歴史資料の非対称性と歴史研究
3. 学会等名 日本アーカイブズ学会2020年度大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 慎 蒼宇
2. 発表標題 日本近代史の「不在」を問う 朝鮮植民地（征服／防衛）戦争から見た官民の「暴徒膺懲」経験
3. 学会等名 歴史学研究会総会・大会全体会「排外主義の時代における歴史学の課題 「排除」と「共生」を問う」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 慎 蒼宇
2. 発表標題 「植民地戦争」の視点から見た朝鮮三・一独立運動
3. 学会等名 朝鮮史研究会第56回大会「三・一運動から朝鮮近現代史を問う」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮本正明
2. 発表標題 取調記録を通じて見た 「2・8独立宣言」への道程
3. 学会等名 民族問題研究所（韓国）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 檜皮瑞樹
2. 発表標題 明治初年の北海道移住と在地社会 - 胆振国有珠郡を中心に -
3. 学会等名 歴史学研究会2019年度大会（近代史部会）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鄭栄桓
2. 発表標題 解放直後在日朝鮮人の対日過去清算の経験と日本軍「慰安婦」問題
3. 学会等名 日本軍「慰安婦」問題解決のための歴史的課題：国際学術会議（韓国）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計14件

1. 著者名 愼 蒼宇 / 小山田紀子 吉澤文寿 ウォルター・ブリュイエール・オステル編	4. 発行年 2023年
2. 出版社 藤原書店	5. 総ページ数 535
3. 書名 愼 蒼宇「日本の植民地化と朝鮮の民族運動 - 「植民地戦争」の視点から」所収（『植民地化・脱植民地化の比較史 - フランス アルジェリアと日本 - 朝鮮関係を中心に』）	

1. 著者名 鄭栄桓 / 小山田紀子 吉澤文寿 ウォルター・ブリュイエール・オステル編	4. 発行年 2023年
2. 出版社 藤原書店	5. 総ページ数 535
3. 書名 鄭栄桓「外国人登録法の指紋押捺制度と在日朝鮮人団体：1956年秋の反対運動を中心に」、同「戦争責任論と植民地支配責任論の交点：在日朝鮮人史から考える」所収（『植民地化・脱植民地化の比較史 - フランス アルジェリアと日本 - 朝鮮関係を中心に』）	

1. 著者名 愼 蒼宇 / 宮嶋博史責任編集	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 409
3. 書名 愼 蒼宇「一・2の3～5・8～12義兵戦争（解題・翻訳） / 五・3の10・11亡命政府の樹立（解題・翻訳）」 『原典朝鮮近代思想史4 植民地化と独立への希求-保護国から三・一独立運動へ』	

1. 著者名 宮本正明 / 吉野誠責任編集	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 434
3. 書名 宮本正明「二 - 3「生活改善運動」(解題・翻訳)」「『原典朝鮮近代思想史5 民族の解放と社会変革1920年代』	

1. 著者名 宮本正明 / 趙景達責任編集	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 426
3. 書名 宮本正明「三 - 2「流言蜚語」「不穏言動」の世界」、三 - 3「学徒出陣」、五 - 4「在日朝鮮人の思想」(解題・校訂・翻訳)」「『原典朝鮮近代思想史6 15年戦争から解放へ-1930年代から解放・分断まで』	

1. 著者名 愼 蒼宇(編集協力)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 404
3. 書名 原典朝鮮近代思想史3-近代改革をめぐる抗争(甲午農民戦争から大韓帝国まで)	

1. 著者名 伊藤俊介・小川原宏幸・愼 蒼宇編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 有志舎	5. 総ページ数 420
3. 書名 『「下から」歴史像を再考する - 全体性構築のための東アジア近現代史』(「はじめに」/拙稿「「不穏」から「騒擾」への予兆 武断政治期後半における兵站保護と朝鮮民衆」所収)	

1. 著者名 鄭栄桓	4. 発行年 2022年
2. 出版社 以文社	5. 総ページ数 500
3. 書名 歴史のなかの朝鮮籍	

1. 著者名 共著（外村大・中山大将・松田ヒロ子・坂田美奈子・加藤恵美・菅野敦志・伊地知紀子・岡田泰平・浅野慎一・宮本正明）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 332
3. 書名 和解をめぐる市民運動の取り組み その意義と課題	

1. 著者名 愼 蒼宇	4. 発行年 2020年
2. 出版社 新日本出版社	5. 総ページ数 253
3. 書名 内海愛子編『日韓の歴史問題をどう読み解くかー徴用工・日本軍「慰安婦」・植民地支配』担当範囲「朝鮮三・一独立運動100年ーその歴史認識をめぐって」所収	

1. 著者名 鄭栄桓	4. 発行年 2020年
2. 出版社 大月書店	5. 総ページ数 260
3. 書名 康誠賢（古橋綾訳）『歴史否定とポスト真実の時代 日韓「合作」の「反日種族主義」現象』監修・解説執筆	

1. 著者名 鄭栄桓	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 224
3. 書名 在日韓人歴史資料館編、李成市監修『東アジアのなかの二・八独立宣言 若者たちの出会いと夢』担当範囲「三・一独立運動の残響 在日朝鮮人史の視座から」	

1. 著者名 愼 蒼宇	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ソニン（韓国）	5. 総ページ数 501
3. 書名 植民地朝鮮の警察と民衆世界（1894-1919）-近代と伝統をめぐる政治文化	

1. 著者名 鄭栄桓	4. 発行年 2019年
2. 出版社 プルンヨクサ（韓国）	5. 総ページ数 624
3. 書名 解放空間の在日朝鮮人史：独立への隘路	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	檜皮 瑞樹 (HIWA MIZUKI) (00454124)	千葉大学・大学院人文科学研究院・准教授 (12501)	
研究分担者	宮本 正明 (MIYAMOTO MASA AKI) (20370207)	大阪経済法科大学・公私立大学の部局等・研究員 (34427)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	鄭 栄桓 (CHONG YOUNG-HWAN) (90589178)	明治学院大学・教養教育センター・教授 (32683)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関